

# 「日常生活から生まれた作品を日常空間へ」

浅見俊哉 (美術家・写真作家)



「青写真の瓦版 -2021」は、木材で制作した7本の看板に、コロナ関連記事の新聞紙の上に日用品を焼き付けたフォトグラム作品『現在の青図 - 社会の皮膚 COVID-19-』を展示した。7枚の作品は毎日、朝入れ替えられ、会期中合計63枚が展示された。朝刊が毎日ポストに届くように、別所沼公園を散歩する人、ランニングする人、釣りをする人など、日常生活で公園を利用する人たちのルーティンの中に作品を鑑賞する機会をつくりたいと考えた。

この作品の制作の動機は、2020年4/7より始まった緊急事態宣言。コロナ禍において日々変化する「今」を忘れないように、COVID-19関連記事の新聞紙に感光液を塗布し、マスクをはじめとする生活用品（検温計、手袋、アルコール消毒液、手帳、空き瓶、食材など）をモチーフに、毎日生きている証を残す日記のように制作を重ねた。フォトグラムとは、カメラを使わない写真技法で青写真とも呼ばれる。毎日様々なモチーフを新聞の上に乗せて、一定時間の太陽光を当てることで作品制作を行う。緊急事態宣言下、久しぶりの外出の機会に、玄関を開けた時、直接光が掌にあたる新鮮さがあった。自らの皮膚が太陽光で日焼けする現象もフォトグラムであると改めて感じた経験から、新聞を「社会の皮膚」と見立てた。そこに、日々の時間を焼き付けることで「社会の情報」と「個人の記憶」の関係を探り、記録することがライフワークとなった。



制作の様子（露光時間は約10分）

制作は、すべてインスタグラム@shunya\_asamiにアップしている



作品展示は、2021年10/30-11/7の9日間行った。幸い天気にも恵まれ、秋の穏やかな時間の中で作品を展示できた。全ての会期に在廊し、作品展示空間で何が起きるのか体験した。3日目ぐらいから、「どのようにつくっているのか」「なぜ制作しているのか」など作品について質問されることが多くなった。作品や展覧会の意図、ヒアシンズハウスについて伝えるとランニングの後に見にくる人、散歩の後に立ち寄ってくれる人などが現れるようになった。会期中、お互いのコロナ禍の生活について、公園や今感じていることなど作品を通してその人たちと様々な会話をした。中には、「作品が特別な場所ではなく、こうした日常の空間にあることで彩りを取り戻したように感じてほっと安心した。」「紅葉や空の色ともあっている。」と伝えてくれる人もいた。さらに、今回の展覧会の機会に、初めてヒアシンズハウスに入ったという人も多数いた。展示を通して改めて地域にある魅力を発見し、通ってくれる人が現れた。こうした企画が継続的におこなわれることで、さまざまな人が日常的に集い交流する立原道造が構想した「アートコロニー」が実現するのではないかと考える。



アーティストトークの様子 (2021.11/7)

またコロナ禍の野外空間での展覧会の作り方について考える契機ともなった。1つ目は、野外空間について。野外空間は、換気の手立てが不要であり、作品や人との一定の距離を保ちやすい。さらに、光や季節の変化（樹木の紅葉等）、さまざまな変化と共に作品をみる。コロナ禍を受け、様々な自然環境との関係を再考する機会が多くなっている中、作品を展示する方法、それを鑑賞する方法についても考える機会になる。2つ目は、公園という環境について。公園は様々な利用者がいて作品を見にくる人だけではない。その人たちにどのように作品を通してアプローチをするのか考える機会になる。芸術活動が閉鎖的な取り組みではなく、換気の良い環境で行っていく為にも今後もこの経験を生かしたい。